

【翻訳】

コンラート・フォン・メーゲンベルク 『自然の書』(第3章:動物)〈後編〉

荻野 蔵平 訳

**Konrad von Megenberg: „Das Buch der Natur“.
(III. HIE HEBT SICH AN DAZ DRITT STÜCK DES PUOCHES.
A. VON DEN TIEREN IN AINER GEMAIN.)**

übersetzt von Kurahei OGINO

要旨

„Das Buch der Natur“, das zwischen 1347 und 1350 von Konrad von Megenberg verfasst wurde, ist die älteste bedeutende Naturgeschichte in deutscher Sprache. Es ist weitgehend eine Übersetzung von Thomas de Cantimprés „Liber de natura rerum“ (zwischen 1225/26 und 1241 entstanden), enthält aber auch neue Beobachtungen und Ergänzungen. Dieses im Mittelhochdeutschen verfasste Lehrbuch war auch in Laienkreisen lesbar und fand rasch sehr weite Verbreitung (über 100 Handschriften). Die folgende japanische Übersetzung, der die von Franz Pfeiffer herausgegebene Textausgabe „Das Buch der Natur“ (1861/1994) zugrunde liegt, behandelt den letzten Teil des dritten Kapitels „Von den Tieren in einer Gemein“.

キーワード: コンラート・フォン・メーゲンベルク (Konrad von Megenberg)、『自然の書』 („Das Buch der Natur“)、トマ・ド・カンタンプレ (Thomas de Cantimpré)、『事物の本質についての書』 („Liber de natura rerum“)、自然誌 (Naturgeschichte)。

はじめに

以下の翻訳は、コンラート・フォン・メーゲンベルク著『自然の書』(Konrad von Megenberg: „Das Buch der Natur“, 1347~1350)の第3章A「動物(四足獣)一般について」の最終部分(52節から69節まで)を訳出したものである。底本には、Pfeiffer版(1861/1994)を使用し、Schulz(1897)とSollbach(1989)の2種類の現代ドイツ語訳を適宜参照した。なお本訳文では、読みやすさに配慮して適宜段落分けを行った。

『自然の書』は、ドイツ語で書かれた最初の自然科学書であると同時に、100点以上の写本が現存していることからわかるように、中世・近世において最もよく読まれた著作の一つである。しかしながらその存在は、日本においてはまだ十分に知られていないと言えないため、これまでに訳出した部分(熊本大学文学部『文学部論叢』第104号、2013年、pp. 89-105、ならびに同紀要第105号、2014

年、pp. 87-100に掲載)に引き続き本編では最終部分を取り上げ、これをもって第3章A「動物(四足獣)一般について」の訳出作業を完了としたい。その内訳は以下の通りであるが、そこには実在の動物の他に、存在が特定できないあるいは空想上のものと思われる動物なども含まれている。なお52章と60章、ならびに57章と58章は、タイトルを「イタチ」ならびに「ヒョウ」としたが、扱われている動物が同一種なのか異種なのかは特定できなかった。

52. イタチ (wisel)、53. ネズミ、54. 野生のロバ、55. オノケンタウロス、56. ヒツジ、57. ヒョウ (pandre)、58. ヒョウ (pantier)、59. ピロス、60. イタチ (eltes)、61. リス、62. サル、63. ウシ、64. ブッシュバック、65. モグラ、66. トラ、67. 一角獣、68. クマ、69. キツネ。

なお本翻訳は、長年続けているドイツ語輪読会において行っている本書訳読作業の成果の一部であることを記し、そのメンバーとして熱心に参加していただいた吉田李佳、岩佐銘江の両氏にここに改めて感謝申し上げる。

【訳】

第三章

52. イタチ (wisel) について

mustelaとはイタチのことで、ギリシャ語では「長いネズミ」の意味である。この動物には二種類あり、一方は大きく、他方は小さい。小さい方は、イシドールによれば、ictideと呼ばれる。イタチがヘビと戦う時には、ヘビの嫌いな草であるカラクサマケンで身を守る。イタチは、ネズミとヘビに敵意を抱いていて、可能とあらばどこでも彼らを襲う。ソリヌスは、イタチはラテン語でバシリスクと呼ばれるヘビを殺すと述べている。バシリスクとは、ひと睨みでまたはひと息で人や動物を殺すと言われる怪物のことである。イタチの胆汁は、コブラと呼ばれる黄色のヘビの噛み傷に効くが、それ以外の部位は、プリニウスによると、人にはすべて有害である。イタチは、人に見つからないように、しばしば仔を棲家と別の場所に移す。イタチは、ネズミを捉まえる優秀な狩人であり、また受けた怨みはすぐにでも晴らす動物である。

53. ネズミについて

musとはネズミのことである。ゾウの項でもすでに述べたように、ネズミの匂いがゾウは大嫌いである。アリストテレスは、水を飲むとネズミは死ぬという。それはネズミの体質が湿だからである。ネズミの糞には、腸を柔らかくする効果があるので、浮浪者たちはそれをワインや水で割って薬として飲む。プリニウスは、リビアに棲むネズミは水を飲まないと言っているが、それは全てのネズミに当てはまるかもしれない。チーズがたくさんある場所を見つけると、ネズミはすべてを味見した後で、一番おいしいものを食べる。ネズミは、満月になると、チュウチュウとせわしく鳴くが、それ以外の間はおとなしくしている。

発情期のネズミは、人には有害である。尿をかけられると皮膚が腐るからである。ネズミの肝臓は、満月とともに大きくなるが、それは巻き貝の例でも分かるように、海の動物の中には月の満ち欠けに応じて大きくなるものがあるのと同じである。さてあなたはオコジョもネズミの一種ではないかとおっしゃるかもしれない。しかしそれについてはこう申し上げよう。オコジョはイタチの仲間、どうやらイシドールがictideと呼んでいるもののことである。また多くの人たちは、イタチの毛は赤から白に変わると述べているが、それは年をとると白くなるせいである。さらにイタチは生後9年で毛が白くなると語る人もいるが、オコジョが生むのは白いオコジョである。

54. 野生のロバについて

onagerは野生のロバ、たくましいロバ、あるいは気の荒いロバのことである。この動物は、イシドールによると、3月15日の夜に12回吠え、日中も同じ回数だけを吠える。それでその日の昼と夜の長さが同じであることがわかるのである。オスの仔が生れると、年老いたロバたちはその仔を隠して性を嘯み切る、とソリヌスは述べているが、母ロバはそのことをよく知っているのも、誰も知らない場所ですら仔を産みかかまうのだという。野生のメスロバは、性欲が強いにもかかわらず、交尾を恥じる。それゆえに、オスロバを憎むのである。それと同じように、人の間でも、性交のことで妻が夫の言いなりにならない時には、夫が妻を怨むことが起るのである。野生のロバは、猟犬に追いかけると、糞をそのままにしておく。イヌはロバの糞の匂いが好きで、その場にずっととどまっているすきに、ロバは逃げおおせることができるからである。交尾の時期にメスのいないロバのオスは、高い山に登り、空気を吸い込み大きな声で吠えるので、他の動物が驚くほどである。

55. オノケンタウロスについて

オノケンタウロス (onocentaurus) は、イシドールが語っているように、怪物である。というのも頭はロバ、胴体は人の姿をしているからである。ヒエロニムスは、聖アントニウスが砂漠でそのうちの一頭を見たと言っている。また別の人々は、それは臍から上が人で、下半身がロバだという。

56. ヒツジについて

ovisとはヒツジのことである。羊飼いたちは、冬を越せるのはどのヒツジかを調べるのに、氷水をしっぽにかけてみる。水をしっかりとふるい落とすものは体が強く、そうでないものは弱い。ヒツジは他の動物よりも知恵がない。病気のヒツジは、得てして他のヒツジも病気にしてしまうので、それを群れから引き離さねばならない。オスヒツジには、牧場を嫌って丘陵に逃げだす癖がある。ただその気性の荒さは、角を切り取ることで緩和できる。群れから離れたヒツジは雷におののいて流産しやすい。それを防ぐためには、群れを一つの屋根の下にいっしょにしておくのがよい。ヒツジは水をたくさん飲ませると、それも午後に濁水を飲ませると太る。それゆえ、羊飼いは餌に塩をたくさん混ぜて水をしっかりと飲ませ、乳の出をよくさせる。イシドールは、オスヒツジの頭には虫がいて、ヒツジ同士がいがみあうのはそれに悩まされるためだと述べている。ヒツジは半年はこちら側を下にして、

後の半年は反対側を下にして横になる。ヒツジは、露に濡れた草を5月あるいはそれ以降に食べたり、麦の穂を8月に食べ過ぎたりすると、すぐに死んでしまう。それと同じことがこの世の快樂を追い求める人にも起る。彼らは永遠の死を迎えることになるからである。それについてポエティウス¹は『哲学の慰め』の中でこう述べている。ジュピターの道に、つまり神の道に二つの樽が置かれてあった。一つにはニガヨモギ（これは苦い草である）が、もう一つには甘い蜂蜜がたっぷり入っていた。つまりわれわれは、神に導かれて、甘さも苦さも混ぜ合わせて生きるべきである。

アリストテレスによると、ヒツジは太り過ぎると仔を産まなくなる。また、黒いヒツジの乳は、白いヒツジのそれより上等で量も多いが、太ったヒツジではその反対になるという。アンブロシウスは、ヒツジが大量の草を食べるのは、辛い冬が怖いからであり、そのため冬が草を奪い取ってしまう前に、たらふく食べるのだと述べている。ヒツジは、湿った牧場よりも乾いた牧場に連れて行った方が長生きする。火事の家からヒツジを連れ出す人は、しっかりと押さえておかねばならない。さもないと火の中にまた戻ってしまうからである。

若いヒツジの発情期が早過ぎるのは、大変まずいことである。というのもそれは疫病の兆候かもしれないからである。アリストテレスによれば、塩辛い水を飲むと、ヒツジは発情期が早く来る。北風の時に孕むと、オスの仔が生まれ、南風の時はメスになる。ヒツジは舌の裏側の血管が白いと、仔も白く、黒いと仔も黒くなり、赤いとまだらになるという。彼はまた、腎臓に脂肪がつくとヒツジは死んでしまうとも言っている。夜休むことは、ヒツジにはよいことである。仔ヒツジの肉は、丈夫で健康な人にはよいが、病人にはよくない。イシドールはこう述べている。ヒツジはラテン語で「見分ける者」の意味である。というのもヒツジは、他の動物よりも、母親を見分けるのがうまいからである。あるいは同じくラテン語でagnusと呼ばれる。これはギリシャ語のagnonにならって「おだやかな」を意味する。なぜならヒツジはおだやかな動物だからである。アレクサンダーは、ヒツジの皮は羊皮紙にはまったく向かないし、その他の動物の脂質の皮も同様だという。アリストテレスは、オオカミがヒツジの毛を食べ排泄すると、地面の糞の中から、他の動物の場合より多くの虫が発生すると述べている。

57. ヒョウ (pardre) について

pardusとはヒョウのことである。これは、ヤコブスが言っているように、pantier (ヒョウ) に似て斑点のある動物である。というのも、皮膚の上に白、黒、赤、黄といった多くの斑点が見られるからである。ソリヌスによると、アフリカでこの動物は水辺に集まるといふ。それは、水の乏しいかの地では、そこに行けば水が見つかるためである。水辺にはメスライオンがいて、この動物は、力づくで、あるいは欲情から他の多くの動物と交尾することがよくあるが、それによってヒョウが生まれたのである。ヒョウの視力は、曲がり角の先が見えるほどに優れている。また気が荒く、すぐに怒り出す。

58. ヒョウ (pantier) について

pantheraは、ソリヌスが言うように、体に色とりどりの斑点のある動物で、まるでたくさんの小さな丸が描かれているようで大変きれいだ。それは黄色、金色や白あるいは他の色をしている。こ

の動物は気性が穏やかで、敵といったら唯一ドラゴンだけである。満腹になると、アリストテレスが言うように、ヒョウは洞穴に隠れ、3日間眠る。眠りから覚めて起きあがると、大きな声で吠える。それを合図に、他の動物たちが集まってくるが、それはヒョウが発する良い匂いのためである。しかし動物たちがその姿を見て怖がるためにヒョウは身を隠すのであるが、それでもなお甘い匂いにつられて後を追ってくる。このようにして、ヒョウは動物をおびき寄せ、来訪者たちを襲うのである。というのもそのうちの何頭かが食われてしまうからである。



図1 ピロス 出典：Spyra (2005), Abb. 46

イシドールはこう述べている。この動物は一回しかお産をしない。なぜかというと、体内の赤ん坊が出産時期を待ちきれずに体内を鋭い爪でひっかくため、母親を半死状態にしてしまうからである。そのため子供を産めなくなるのである。プリニウスが言っているように、鋭い爪を持つ動物は、頻繁には出産ができない。赤ん坊が胎内を動くため、母体を傷つける危険性があるからである。多くの人たちは、ヒョウの肩には月の形をした斑点があり、それが大きくなって三日月ぐらいの形になり、月の満ち欠けに応じて変化するという。他のいかなる動物も恐れないドラゴンが恐れるのは、ヒョウの吠える声である。

59. ピロスについて

pilosusとは、『イザヤ書』で語られているように²、頭が人、胴体が獣の姿をした動物である。ヒエロニムスは、聖なる隠遁者と呼ばれる聖パウロの伝記の中で、この動物は上半身が人で、固い額には角があり、ヤギの足をしていること、またそれはラテン語では、夢魔 (incubum)、サチュロス (satirum)、ファウヌス (faunum) と呼ばれていると述べている。

60. イタチ (eltes) について

putoriusとはイタチのことである。大変な悪臭を放つ動物で、それは怒った時がことのほか臭い。それはアナグマのように、左側の足が右側よりも短い。ニワトリとその卵を好み、ニワトリの肉だけで生きる。また人家の近くにも好んで棲む。それとは別にドイツ語でmader (テン) と呼ばれる動物もいる。これはイタチに大変近い種類であるが、こちらのほうが毛皮が上等である。イタチは、ニワトリを殺したり、捕まえたりするので、ラテン語でmoritorあるいはgallicepsとも呼ばれる。

61. リスについて

pirolusは (キタ) リスのことである。それは小動物で、イタチよりも体は大きいですが、体長は短い。

その色は、棲息する国によって、赤色、茶色あるいは灰色と様々である。色が薄い灰色の場合はオコジョである。なぜならこの動物は、色が違うだけで、リスと同じ仲間だからである。体の色がどのようであれ、リスは腹がつねに白い。この動物には、剛毛が生えていて、長くて幅の広い尻尾があり、その長さは自分の背丈とほぼ同じである。リスが餌を探して出かける途中で川を渡らねばならない時には、軽い枝を見つけそれを水に浮かべ、その上に座って尻尾を船の帆のように高く掲げ風を受けて川を渡る。

62. サルについて

simiaとはサルのことを指す。これは体つきが人間に大変よく似た動物である。この動物は、新月だと喜び、満月や月が欠けてくると悲しむ。ソリヌスは、サルの舌は、他の動物よりも味を区別する能力が優れていると述べている。サルは貪欲で、気が荒く、嘔みつく癖がある。サルには自らを美しく装いたいとする過度の願望があるため、猟師たちは、サルに見えるように、森の中で手袋や靴を身につけたり外したりしてから置いておく。するとサルがやってきて同じことを繰り返す間に捕まえるのである。サルは、何年後に出会っても、主人が見分けられる。サルは子供と遊ぶのが好きだが、時として絞め殺すこともある。好きな餌はリンゴとクルミで、皮がにがいとわかると、実ごとすぐに捨ててしまい、にがさのために甘い実にありつけない。また危害を加えた人をいつまでも怨む。サルは自分の子供を大変可愛がる。家になつたサルが仔を生むと、家人に自分の子供を見せ、人がかわいがってくれると喜ぶ。サルは、外見はいかに人のようであっても、その体内は、アリストテレスが言うように、他の動物よりも人に似ていない。サルには臍がない。メスサルの性器は人の女のそれに、オスサルはイヌのそれに似ている。

63. ウシについて

taurusとはウシのことである。ウシは、家畜のなかで最も強く、おとなしい動物であるが、オオカミやイヌのような他の動物を襲う動物には敵意を示す。ウシがけんかをする時には、舌を出し、歯ではなく、角で戦う。というのも相手に危害を加える歯をもっていないからである。そのため草を食べる時には、先のほうだけ噛み切るので、草を傷めることはない。ウシは年をとるごとに、特に飼育ウシの場合には、その肉はますます柔らかくなる。すべての動物の中では、メスはオスよりも足が速く、声が小さいものだが、ウシだけは例外で、オスのほうがメスよりも声が小さい。

引きウシは、仲間に変やさしい。一緒に犁を引いた仲間のことを気にかけて、姿が見えなくなるといつまでも探し回るからである。人の言うところでは、ウシを温水でよく洗うとよく肥える。ウシの筋は他の動物よりも強く固いが、オスウシはもっと強靱である。ウシの肉は人の血を濃く、胆汁質にする。その肉は、ニンニクを食べ、さらに強いワインと一緒に飲まなければ、胃の中でうまく消化できない。ウシは病気にかかると、すぐに死に長患いはしない。それは、安楽とはいえない生活を送り、日々辛い労働に明け暮れる農民たちをみればわかる。偉大なバシリウスが述べているように、普通のウシの角は、去勢ウシのそれよりも硬い。ウシの血を飲むと命が危ない。ただし温めたウシの血は骨折に効き、骨を強くしてくれる。ウシの胆汁と蜂蜜を混ぜたものを塗ると、棘、木片や金属が抜

け、また矢尻を傷口から取り去ることができる。アリストテレスは、気性の荒いウシをイチジクの樹につないでおくと、性格がおだやかになると述べている。

64. ブッシュバックについて

tragelaphus（ブッシュバック）³は、ドイツ語ではpockhirz（ヤギシカ）と訳せよう。なぜならば、その動物には、顎にヤギのように髭があり、シカのように枝分かかれしたギザギザの角があるからである。この動物は力が強く、敵対するどんな動物からも身を守る。イシドールが述べているように、これは『旧約聖書』で食べることが禁止されている動物にあたる。ラテン語ではまたhircocervusとも呼ばれる。

65. モグラについて

talpaとはモグラ（scher, maulwurf）のことである。これは小さな動物で、目が見えず、色が黒い。ある人々は、モグラは湿って、汚い、腐った土から生まれるのだと言う。それにふさわしくモグラは、地中にのみ棲み、湿った土の中にいるミミズを食べて生きている。モグラは、喉の渇きに苦しむと土中から出てくるが、目が見えないので、土中にまた戻ることができない。モグラを焼いて粉にし卵の白身と混ぜたものを病人の顔に塗ると重い皮膚病に効く。またモグラの血を髪の毛が抜けた箇所塗ると再び生えてくる。

66. トラについて

tigrisはトラのことである。この動物は斑模様をしている。また力が強くて足も速い。イシドールとヒエロニムスによると、ヘルカニア⁴に生息するという。この動物はとても凶暴で、トラの子供を盗んだ猟師は、しばしば親トラから逃げおおせることができない。そのため、アンブロシウスが報告しているように、猟師たちは鏡を背後に投げるのである。すると襲ってきたトラは鏡を見て、そこに自分の仔がいると思い、鏡のそばにたたずみ、鏡に口づけをして抱つく。最後に鏡にまたがり、ひっかくのだが、仔を取り戻すことはない。その間に猟師たちは難を逃れるのである。アリストテレスは、トラは多くの点でウシに似ていると言っている。皮膚は赤みを帯びていて、肉も美味しいからである。それゆえ人はトラを捕まえるのである。

67. 一角獣について

unicornusは一角獣のことで、イシドールが語るように、体が小さい割には力が強い。また体に比べて足が短い。乱暴の上、たちが悪いので、猟師は力ずくで捕まえることはできない。しかし、イシドールとヤコブスによると、汚れを知らぬ乙女をおとりにして捕まえることができるという。乙女を森の中に一人で座らせておくと、一角獣が現れるが、その時には凶暴さはすっかり鳴りをひそめ、乙女の清らかさを称え、彼女の膝を頭に寝入ってしまうという。その間に猟師たちはこの動物を捕えて王宮



図2 「一角獣」 出典：Gesamtverzeichnis

に連れて行き、見世物にするのである。一角獣とは、天使たちの傲慢さと地上の民の背信に怒っておられた、人となる前の主イエス・キリストのことである。病んだこの世の砂漠の中でイエスを迎えられたのが誉れ高き、汚れを知らぬ聖母マリアであり、それによってイエスは天から彼女の胎内に降りてこられたのである。しかし、イエスはその後、ユダヤ人という悪しき獵師たちに捕えられ、惨めにも殺された。しかしやがてイエスは蘇って天の王宮に行き、そのお姿は、すべての聖人たちと天使たちの心の喜びとなるのである。聖母マリア、汚れなき乙女よ、あなたは私たちが何度も助けてくださいました。それは私たちが天国で御子にお目にかかるためでありました。

一角獣には鼻に角がある。グレゴリウスは、一角獣は、捕えられるとその恥辱のために死ぬと述べている。

68. クマについて

ursusはクマのことである。これはまったく恐ろしい動物で、皮を剥ぐと不格好である。手足は人間のそれによく似ている。手と腰は頑丈だが、頭部は弱い。アンプロシウスは、クマのメスは、妊娠後13日目に、ネズミにも満たない大きさの未完成の胎児を産むと述べている。プリニウスは、母親グマは生まれてきた肉塊を四肢が整うまで舐めて加工すると語っている。というのも生まれてきた胎児には、爪以外に何もできあがっていないからである。クマは、人と同様、横になって交接する。ソリヌスは、クマのオスはメスを敬うと述べている。孕んだ動物のなかでクマほど珍しいものはない。クマには陣痛があるからである。クマはメスがオスよりも強く、勇敢である。それと同じようにヒョウのメスもオスよりも強い。ヒョウはまたすぐに人に馴れ、クマよりも賢い。クマは薬としてアリとカニを食べる。プリニウスは、クマの肉は茹でると膨らむが、他の肉でそうなるものはないと述べている。クマは病気に感染しているので、どんな動物もクマが触った餌には触らない。また疲れて休んでいるクマに息を吹きかけられると何でも腐ってしまう。クマを捕まえたら、次のようにすれば視力を奪うことができる。熱した鉄や銅を顔の前に近づければ、すぐに失明し、立っていられなくなる。クマはいつまでも成長する。クマは、蜂蜜を求めてミツバチの巣籠をあさる。それが好物だからである。そのため、獵師たちは穴を掘り、穴に通じる道に蜂蜜を振りかけておく。するとクマが道づたいにやってきて穴に落ちてしまうのである。

69. キツネについて

vulpisとはキツネのことである。キツネには次のような習性がある。病気で命が危なくなると、アンブロシウスによれば、松の木を探して、その幹から流れ出す樹脂を食べてまた元気になるという。また別の人々の言によると、キツネは自らは穴は掘らず、自分が棲む穴はすべてアナグマが掘ったものであるという。というのも、アナグマが穴を掘り終わると、キツネは中にもぐりこみ、糞をするが、その匂いが耐えがたく、アナグマは二度と穴の中に入っていくことはないからである。そのような賢さのおかげで、穴はキツネのものになる。またある人々は、キツネは口と尻が臭いと言っている。

キツネはニワトリやガチョウのような軟らかい肉が好きである。キツネの肉を焼いて粉にし、それをワインにつけたものを心臓喘息の人に与えるとよく効く。キツネの腹の血は耳の痛みに効果がある。ただし扁桃腺を食べると死ぬ。夏になるとキツネの肝臓は熱を帯びる。腹が減って餌がないときにキツネは、死んだふりをして地面に横になって息をこらし、鳥がハゲタカのように自分の上に舞い降りるのをじっと待つ。そのようにして鳥を捕食するためである。というのもキツネは嘴を開け、舌を出したまま待機しているからである。イシドールは、キツネは道をまっすぐではなく、横にそれたり、曲がりくねった歩き方をすると述べている。キツネが追手のイヌをまくときには、イヌのように吠えたり、足跡を消すために樹の枝に上ったりする。鉄のワナにかかったときは、挟まれた足を噛み切り、三本足で逃げる。身動きができない場合には、死んだふりをして、人が来てワナを外したすきに飛び跳ねて逃げる。

【訳注】

（訳注は、既訳部分で解説した事項については、本稿では省略した。熊本大学文学部『文学部論叢』第104号、2013年、pp. 89-105、ならびに同紀要第105号、2014年、pp. 87-100を参照のこと。）

- 1 ボエティウス（480頃～525頃）：ローマの哲学者。最初のスコラ哲学者といわれ、中世論理学の発展に貢献した。『哲学の慰め』の原題はDe consolatione philosophiae。その第二部に「お前は若い時、『一つには禍ひが入り一つには祝福の入った二つの樽』がジュピターの家の入口に置かれてあつたといふ話を学ばなかつたか。」（畠中尚志訳、50ページ）とある。
- 2 『イザヤ書』（34、14）には「荒野の獣はジャッカルに出会い、山羊の魔神はその友を呼び、夜の魔女は、そこに休息を求め、休む所を見つける」とある。ここでいう「山羊の魔神」がピロスのこと。
- 3 tragelaphus（ブッシュバック）：レイヨウ、別名アンテロープの仲間。ウシ科に属するが、姿はシカに似ている。
- 4 ヒェルカニア：カスピ海南東岸の古代ペルシャの一地方。

【参考文献】

1) テキスト：

Konrad von Megenberg: Das Buch der Natur. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. Herausgegeben von Franz Pfeiffer. Georg Olms Verlag Hildesheim・Zürich・New York (3.

Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1861) 1994.

Konrad von Megenberg: Das »Buch der Natur«. Band II Kritischer Text nach den Handschriften. Herausgegeben von Robert Luff und Georg Steer. Max Niemeyer Verlag Tübingen 2003.

2) 翻訳 :

Das Buch der Natur von Conrad von Megenberg. Die erste Naturgeschichte in deutscher Sprache. In Neu-Hochdeutscher Sprache bearbeitet und mit Anmerkungen versehen von Dr. Hugo Schulz, Professor an der Universität Greifswald. Verlag und Druck von Julius Abel Greifswald 1897.

(<http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/Schulz1897/>, 最終閲覧日 : 2014年11月9日).

Das Tierbuch des Konrad von Megenberg. Ins Neuhochdeutsche übertragen und eingeleitet von Gerhard E. Sollbach: Die bibliophilen Taschenbücher Nr. 560. Harenberg Kommunikation, Dortmund 1989.

3) 参考文献 :

Feistner, Edith (2011) (Hrsg.) : Konrad von Megenberg (1309-1374) : ein spätmittelalterlicher ‚Enzyklopädist‘ im europäischen Kontext. Unter redaktioneller Mitarbeit von Nina Prifling. Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft Band 18 (2010/2011) Reichert Verlag Wiesbaden.

Gesamtverzeichnis Autoren/Werke Konrad von Megenberg: 'Buch der Natur'. Handschriftencensus: Eine Bestandsaufnahme der handschriftlichen Überlieferung deutschsprachiger Texte des Mittelalters.

(<http://www.handschriftencensus.de/8282>, 最終閲覧日 : 2014年11月9日).

Lexikon des Mittelalters (1999). 9 Bde. , Metzler Verlag Stuttgart/Weimar.

Spyra, Ulrike (2005) : Das »Buch der Natur« Konrads von Megenberg. Die illustrierten Handschriften und Inkunabeln. Böhlau Verlag Köln/Weimar/Wien.

蔵持不三也 (監修)、松平俊久 (著) 『図説 ヨーロッパ怪物文化誌事典』、原書房、2005年。

『聖書』新共同訳、共同訳聖書実行委員会、1987年。

ポエティウス『哲學の慰め』畠中尚志訳、岩波文庫、岩波書店、1958年。